

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中村 佳子
論文担当者	主 査 辻村 亨
	副 査 大村谷 昌樹
	副 査 池内 浩基
学位論文名	Clinical outcomes of gastric polyps and neoplasms in patients with familial adenomatous polyposis (家族性大腸腺腫症患者に合併した胃病変の臨床転帰)
論文審査の結果の要旨	
<p>家族性大腸腺腫症 (familial adenomatous polyposis: FAP) 患者の多くは大腸癌により死亡するが、予防的大腸全摘術の導入により、近年ではデスマイド・十二指腸癌、胃癌などの大腸外随伴病変が予後に影響するようになってきた。本研究では、FAP に随伴する胃病変の特徴を明らかにするために、1997 年 10 月から 2011 年 12 月までに国立がん研究センター中央病院にて FAP と診断された 142 例のうち上部消化管内視鏡検査が施行された 80 例を対象とし、患者背景、胃病変の内視鏡所見、病理組織像、治療成績、長期経過を調べ、FAP 患者の胃病変を臨床病理学的に検討した。患者背景は、男性:女性=52:28、初回の上部消化管内視鏡検査施行平均年齢は 40 歳、観察期間中央値 6.5 年 (range:0-14)、観察間隔は 1 年毎が 45 例 (56%) であった。合併した胃病変は、胃底腺ポリポースが 51 例 (64%)、腫瘍性病変が 22 例 (28%) であった。胃腺腫と粘膜内癌を含む非浸潤性腫瘍が 20 例 (24 病変)、粘膜下層以深に浸潤する癌 或いは未分化成分を含む癌が 2 例 (2 病変) であった。胃腫瘍性病変と診断された平均年齢は 46 歳、発生部位は胃上部 3 分の 2 に 19 病変 (73%)、腫瘍径中央値は 10 mm (range:3-70)、病理診断は胃腺腫 12 病変 (46%)、分化型腺癌 14 病変 (54%) であった。胃腫瘍性病変の発生した背景粘膜には、萎縮性胃炎が 13 例 (59%) と最も多かったが、萎縮性胃炎のない胃底腺ポリポース症例も 8 例 (36%) 存在した。胃腫瘍性病変に対して内視鏡切除が 11 病変 (42%) に施行され、手術が 4 病変 (15%) に施行された。異時性腫瘍を 7 例 (15 病変) に認めるも、11 病変 (73%) が内視鏡的に切除され 4 病変が腺腫であり経過観察となった。経過観察中に 6 例が他病死するも、胃癌による原病死はみられなかった。</p> <p>FAP 患者の胃腫瘍性病変の合併率は 28% と高頻度であったが、胃癌による原病死はみられず、適切な間隔による内視鏡検査により胃腫瘍性病変を早期発見できていることが予後良好に寄与していると考えられた。背景粘膜として胃底腺ポリポースまたは萎縮性胃粘膜をもつ症例は胃癌発生のハイリスク群であり、厳重な経過観察が必要と考えられた。本研究により見出された FAP に随伴する胃病変に関する知見は、FAP 患者の胃病変の臨床的対応を考える上で極めて重要なものであり、学位授与に値すると判断した。</p>	